又杖錢子、是佛坊等の諸號あり、

〔近世奇跡考 三〕榎本其角傳

寛文元辛丑年七月十七日生る、榎本は母方の姓と云、本姓は竹下、一に竹内と云、其爪庵の説也、○中略 延寶二十歌仙、田舍の句合等に螺舍、あるひは螺子とあり、初名なるべし、一蝶たがかけの讃に、螺舍其角とつづきの原に、麒角ともかけり、江戸鹿子、江戸圖鑑等に、龜鶴とあるは誤ならん、晉其角と稱せしは、易經に、晉其角（すゝむそのつのを）とあるにもとづけり、寶晉齋は米元章が硯に鐫たる文字也、其硯を得て、寶晉の二字、寶井晉子と云によくかなへりとて、佐玄龍に扁額をかゝしめて、庵にかけ、則寶晉齋と號せしよし五元集に見ゆ、

〔俳家奇人談 中〕服部嵐雪

服部嵐雪は、淡州小榎並村に出生す、幼名久馬助、○中略 蕉門に遊て、俳名を治助といふ、後嵐雪といへるは、嵐の庭の雪ならではと思ひ寄り侍る愚さ、今更改んもをこがましと笑ふ事度々なり、○中略 初に黄落庵、寒蓼堂の稱あり、後に雪中庵、一に不白軒、玄峯堂と號せしは、禪錄に、雪千山を埋む、什麼孤峯不白なるといふ語によれるとぞ、

〔鶉衣〕自名つく説

遁世の姿、すでに定まりぬ、さてはうき世の名にもあらじ、さるべき二字にあらためばやと、名を思ひ、字をえらむに、今は父母も世にまさず、官路もいとひ離れたれば、忠孝の字義をとらむも、跡のまつりとやいふべからむ、よし又四書古文の拔書もあまねく人の取盡し、まして歸去來のことばなど、あらゆる隱者のむしり取て、骨ばかりに喰ひちらしたる、さらば博識の門に乞はゞ、意味深長の二字もなどあらざるべき、されども夫は耳遠ければ、名はいかにと問聞かむ人の、とみに心得ぬ顏の口をしく、ほね折の詮なき心地すれば、これは其書の誰が言なりなど、一人々々に